

膵超音波内視鏡下穿刺吸引法における残渣検体腫瘍マーカーの臨床的意義について

◎米田 操¹⁾、前河 裕一¹⁾、棚橋 伸行¹⁾
鈴鹿医療科学大学¹⁾

【はじめに】

膵領域の細胞診は、超音波穿刺吸引細胞診が実施され膵腫瘍診断に寄与している。膵腫瘍の穿刺材料として細胞・血液・粘液成分が得られ検査対象となるのは細胞成分のみで血液・粘液などの残渣成分は破棄される。今回我々は、腫瘍内から採取された残渣検体腫瘍マーカーを測定して、膵腫瘍の診断率向上、病型分類が可能かどうかを検討した。

【対象と方法】

対象は、膵管癌（腺癌）36 症例とした。臨床診断が膵管癌であった 28 症例、膵管癌疑いが 8 例、非機能的腫瘍が 6 例。検査後、シャーレに付着した血液、粘液成分をリン酸緩衝液（5ml）で洗浄希釈。その液をスピッツ管へ回収し、3,000rpm、10 分間遠心を行った。その上清の、CA19-9、SPAN-1、DUPAN-2、IgG4 を測定。統計処理は、Stata 17.0（StataCorp LLC, College Station, TX）を用いた。

【結果】

① 血清腫瘍マーカーと腫瘍径との相関性は CA19-9 が $R=0.4065$ 、SPAN-1 が $R=0.4164$ 、DUPAN-2 は $R=0.0187$ で

相関は認めなかった。

② 非機能的腫瘍 6 症例、膵管癌疑いであった症例 8 症例の残渣腫瘍マーカーは正常値を示す非機能的腫瘍が 6 症例に認められ、残渣腫瘍マーカーである CA19-9、SPAN-1、DUPAN-2 の

いずれかが高値を示した。

【考察】

血清腫瘍マーカーである CA19-9、SPAN-1、DUPAN-2 の相関性は認められなかった。残渣腫瘍マーカー値と腫瘍径は、DUPAN-2 が $R=0.5512$ と一定の相関性を示し膵管癌の病型分類が可能であることが示唆される。残渣腫瘍マーカー測定が診断率の向上につながると考えられる。

【結論】

残渣検体で膵腫瘍マーカーである CA19-9、SPAN-1、DUPAN-2 の測定が膵がんの細胞診断率向上に寄与すると考えられる。残渣検体の DUPAN-2 は病型分類に有用であることが示唆された。DUPAN-2 の高値は予後不良が示唆される。